

「第三者」性のポリティクス：19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編

著者	佐々木 一恵
出版者	日本アメリカ史学会
雑誌名	アメリカ史研究
号	42
ページ	73-90
発行年	2019
URL	http://hdl.handle.net/10114/00023747

「第三者」性のポリティクス

— 19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と 公共領域の再編 —

佐々木 一 恵

1. はじめに— 本研究のテーマと問題設定

1901年のニューヨーク市長選において、元コロンビア大学の学長で市民連合の候補のセス・ロウ (Seth Low) が勝利した。長年、ニューヨークの社会改革や市政改革に携わってきたロウは、熱心な聖公会教会員でもあった。そして、ロウと同じく聖公会教会員で、ニューヨークにおける新市政誕生の立役者であったロバート・フルトン・カティング (Robert Fulton Cutting) は、ロウの当選祝賀会で次のように語っている。

今や民主的な制度を通じた人類愛の拡張は大きなうねりとなっており、20世紀の宗教は諸々の社会問題を解決するための重要なツールの一つとして、政府を用いる方向へと進んでいくだろう¹。

20世紀を「民主主義」「宗教」「政府」の三位一体に向かう時代と展望したカティングのヴィジョンは、当時、多くのニューヨークのプロテスタントの社会改革者の間で共有されるものであった。そして新たな世紀の幕開けの年に、志を共にするロウがニューヨークの市長選を制したことは、彼らにとってまさに啓示的な出来事であった。ロウの市長就任に際して出版されたニューヨークの社会改革活動の記録集には、『ニューヨークの救済・贖罪 (*The Redemption of New York*)』というタイトルがつけられた²。このタイトルからも、ニューヨークという街が彼らの努力を通じて罪と悪から解放され、多様な存在のすべてが(キリストにあって)一つになることが、もはや絵空事ではなく現実のものとなりつつあるとする彼らの希望と自負の念がうかがえる。

彼らが活動を展開した19世紀末のニューヨークは、金と権力をめぐり人びとが鎬を削るまさに「富と物欲の街 (the city of mammon)」と呼ばれるにふさわしい街であった³。目まぐるしく変貌し発展を遂げるニューヨークには多種多様な人びとが流入し、都市空間は階級やエスニシティの境界による線引きが繰り返され断片化していた。こうした街の分断に強い危機感を抱いたのが、プロテスタントのブルジョワ層であった。彼らは、細かく裁断されたニューヨークの都市空間を縫合する試みを推進していく。その基盤の一つとなったのが、インスティテュショナル・チャーチ (the institutional church) と呼ばれる、主に労働者とその家族向けの多種多様なサービスや福祉活動を展開した教会であった⁴。プロテスタント教会のなかでも、インスティテュショナル・チャーチ運動をいち早く積極的に展開したのが聖公会教会 (The Episcopal Church) であった⁵。

米国聖公会は18世紀末に英国国教会から独立した教会で、ニューヨークの聖公会教会には建国当初からの名士の家系を含む富裕層が多く所属していた。また、男性信者は聖公会と繋がり強いコロンビア大学で学ぶことが多かった。さらに、英国国教会との繋がりから、19世紀半ばに英国で興隆したキリスト教社会主義の影響をいち早く受けたのも聖公会であった⁶。19世紀末には、ニューヨークの聖公会はアメリカ合衆国(以下、アメリカ)における社会的キリスト教運動の先駆的存在となっていく。こうした社会的キリスト教運動を聖職者とともに熱心に担ったのが、平信徒の聖公会員であった。彼らは、フリー・チャーチ(信者席貸制度を廃止して、より多くの労働者とその家族に教会の門戸を開く)運動や、インスティテューショナル・チャーチ運動に積極的に関わっていった。また、教会における活動を足場に、ニューヨークにおける様々な社会改革運動に取り組んでいった⁷。

なかでも、ニューヨークの男性聖公会員が熱心に取り組んだのが無党派による市政改革を目指す「善良な政府(the Good Government)」運動であった。冒頭で述べたカティングやロウも、ニューヨーク市における「善良な政府」運動の中心的存在であった。そして、この両者がともに平信徒のリーダーを務めていたのが聖公会のセント・ジョージ教会(St. George's Church)であった。当時セント・ジョージ教会は、大銀行家で熱心な聖公会教会員であったJ・P・モルガン(John Pierpont Morgan)が運営に深く関わっていたことから、「J・P・モルガンの教会」と呼ばれていた。19世紀末、セント・ジョージ教会は聖公会員の「善良な政府」運動の活動拠点となっていく。

先に述べたようにカティングやロウなどのプロテスタントの社会改革者を「善良な政府」運動へと駆り立てたのは、ニューヨークという街が分断と対立に陥っているという危機感であった。その背景にあったのが、宗教・政治・階級が結びついた二極化の進行であった。19世紀の半ばまでにプロテスタント教会の主流となっていた福音主義派は、ブルジョワ層の支持が厚い共和党を通じて、禁酒運動をはじめとする個人のモラル改革を推し進めていた。これに対し、カトリックやドイツ・ルター派など非福音主義派は、労働者の支持が厚い民主党を通じて、個人の自由の尊重や政府の関与を制限するレッセ・フェールを主張していた⁸。一方、聖公会員はこの二極化の構図に収まらない存在になっていた。宗教においては非福音主義派が多く、階級においてはブルジョワ層であり、また私的領域に関するモラルと法の分離を支持する一方で、市場経済における公共善の達成を目的とする政府の介入を支持していた。いずれの側にもはまり切らない聖公会員の中間的な立ち位置は、聖公会の伝統の一つである「第三者(*tertium quid*)」性、すなわちプロテスタントでもなくカトリックでもなく、あるいはプロテスタントでありかつカトリックでもある、を反映するものでもあった⁹。そして聖公会員は、この聖公会の「第三者」性を土台に、宗教・政治・階級が運動した二極化を解消する方策の一つとして、無党派による市政の確立を目指す「善良な政府」運動を推進していく。

とりわけ彼らが注目したのが、ニューヨークにおいて増え続ける多種多様な人々からなるサイレント・マジョリティーの存在であった。移民を中心とするこの多数派の人々の間に、彼らの運動の意図や目標を広め、票の獲得に繋げていけるかどうか、まさに運動の成否を握る鍵であった。そこで彼らが必要と考えたのが、急速に多様化する人々を、(福音主義)プロテスタント/カトリック(+非福音主義プロテスタント)、共和党/民主党、資本家/労働者などの二項対立を超えた第三極の「市民」として包摂する、より公平で民主的な公共領域の構築であった。この

点で彼らの運動は、今日に通ずる(より正確には今日様々な角度から異議が唱えられている)リベラルな言説空間としての公共領域の形成へと繋がっていく。本稿では、19世紀末のニューヨークの聖公会員によるインスティテューショナル・チャーチ運動と「善良な政府」運動の形成過程をたどり、彼らが聖公会の「第三者」性を土台に展開していった、宗教・政治・階級が連結した二項対立を止揚する試みとその特徴を、19世紀末アメリカにおける公共領域の再編との関係から考察していく。

これまでの先行研究においては、「善良な政府」運動は、都市史家のジェームズ・J・コノリーが指摘しているように、エリート主義的革新主義運動の典型として、あるいは1871年のウィリアム・M・ツイードの汚職事件以降の市政改革運動の一環として研究されてきた¹⁰。確かに、「善良な政府」運動を推進したニューヨークの聖公会員は、都市エリート層の革新主義者でもあり、また市政改革に積極的に取り組んだマグワンプでもあった¹¹。しかし、革新主義者としてであれマグワンプとしてであれ、宗教が考察の対象となることはなかった。一方、聖公会員が熱心に関わったインスティテューショナル・チャーチをはじめとする社会改革運動は、社会的キリスト教運動(the Social Christianity movement)の一部として研究されてきた¹²。そして、社会的キリスト教運動の推進者については、アメリカ宗教史家のクリスチャン・スミスが指摘するように、「20世紀の革新主義者のアマチュア的先駆者」と見られることが多かった¹³。こうした市政改革や社会改革に関する研究における、アマチュア/プロフェッショナルの線引きの基準になってきたのが、宗教/世俗の区分である。そして、この線引きの区分から浮かび上がってくるのが、公的領域においては世俗であることがプロフェッショナルの前提条件でありかつ「進歩的」であるとする認識である。しかし、19世紀末のニューヨークの聖公会員の活動を見るならば、インスティテューショナル・チャーチをはじめとする聖公会教会の活動と「善良な政府」運動との間を、回転扉を通り抜けるように行き来していた。そこで本稿では、この宗教から世俗へという進歩のベクトルを一旦脇におき、逆に宗教と結びついた理念・信条・アイデンティティが、いかに公的領域の中に埋め込まれていったのかを探っていく。

この過程の分析において手がかりとなるのが、社会学者のベルナール・ライールの「異種混淆的な複数の性向の担い手」としての行為者の概念である。ライールによると、個人は、家族・教育・職業・宗教・政治・文化などの多種多様な社会化の文脈を往来することで、「不均質で、場合によっては対立しあい矛盾しあう習慣(行為の図式)」を身体化していくという。そして、この一貫しない性向の「貯蔵庫」としての行為者が、複数の「現在」に遭遇するときに実践が産出されるという¹⁴。このライールの、「身体化された過去」+現在の文脈=実践という視座を手がかりに、なぜ、裕福な家庭出身のブルジョワ層である聖公会員が、一見すると自らの階層の利益と相反する行為(労働者との連帯の模索など)を行い、また一方では、同じ階層に属するブルジョワ層プロテスタントとは一線を画し、個人のモラルの改善を通じた社会改革とは異なるスタンスを取ったのかを探っていく。そこから聖公会員が構築を試みたりベラルで「中立的」な公的領域の特徴と彼らのヘゲモニー実践について考察したい。

本稿の構成としては、まず19世紀後半の聖公会教会における社会的キリスト教運動の影響と、その一環としてのインスティテューショナル・チャーチ運動について、その先駆的存在となった聖公会のセント・ジョージ教会の活動を中心に見ていく。次に、ニューヨークの聖公会教会が

信徒席料を取らないフリー・チャーチ化を推進するなか、フリー・チャーチ運動が市政改革運動と結びつき「善良な政府」運動へと展開していった過程を追っていく。とりわけ、聖公会員の「善良な政府」運動の推進者が、多様なバックグラウンドのサイレント・マジョリティーを第三極としての「市民」として統合する試みのなかで、政治に公共善を取り戻そうとした過程に注目する。そこから聖公会員の活動に、彼らの「身体化された過去」がどう関わり、それがリベラルで「中立的」な公共領域の形成とどのように接続していったのかを検証する。

2. 聖公会教会とインスティテューショナル・チャーチ運動

ニューヨークにおける聖公会教会は、植民地期に英国国教会が実質的な公定教会であったことから、建国当初から影響力のある教会であった。ヴァージニアなど福音主義的な低教会(low church)が主流であった地域とは異なり、ニューヨークではカルヴァン主義的なピューリタニズムに懐疑的な高教会(high church)が主流であった。第二次覚醒運動を通じて、福音主義がプロテスタント教会の中核を占めるようになると、高教会は聖公会の伝統を保持する方向へと向かっていく。その一つが寄宿舎学校(boarding schools)の設立であった¹⁵。情緒的な回心体験を重視する福音主義の影響から若い聖公会員を遠ざけ、彼らを聖公会員のキリスト教市民として育成していくために、男子寄宿舎学校を次々と設立していった¹⁶。こうした寄宿舎学校には、とりわけ都市プロジョワ層の聖公会員の子弟が集まっていった¹⁷。さらに、私的領域における個人の自由を重視していた聖公会は、福音主義派の社会改革者らが提唱する新たなモラル社会の構築、とりわけ立法化など政府の関与を通じた個人のモラルに関する社会改革に対しても、否定的なスタンスを取った¹⁸。そのため、アンテベラム期のニューヨークの聖公会員は、奴隷制廃止運動や禁酒運動などに対して一定の距離を取ることが多かった。

このように、福音主義と距離を置き、とりわけモラル問題ではリベラルな個人主義を重視するスタンスと取っていたニューヨークの聖公会員ではあったが、経済問題においては、市場経済における個人の経済活動の自由を最優先させるレッセ・フェールを支持しない傾向があった。その背景には、彼らの多くが、モラルに基づく厳格なルールに則り商取引を行う、ニューヨークのジェントルマン資本家層の伝統を引き継ぐブルジョワ富裕層であったことがあげられる¹⁹。さらに、若い世代の聖公会員の間では、19世紀半ばのヨーロッパで興隆したキリスト教社会主義運動の影響がそこに加わっていく。イギリスにおいてフレデリック・D・モーリス(Frederick Denison Maurice)やチャールズ・キンズリー(Charles Kingsley)らが掲げたキリスト教社会主義の理念や実践が、1860年代末以降、アメリカの聖公会教会に広がっていった。とりわけ、「寛容・包括性・合理性」を掲げて組織化された広教会(broad church)派が急速に勢力を伸ばし、キリスト教社会主義の理念と実践を聖公会員の間に広めていった²⁰。1874年には広教会と中心とする聖公会会議(The Episcopal Church Congress)が結成され、ニューヨークで開催された第1回大会では、労働問題を中心課題とする方針が明確に打ち出された²¹。

こうした19世紀後半における聖公会教会の変化を、のちに社会的キリスト教運動のリーダーとなるバプテスト教会のウォルター・ラウシェンブッシュ(Walter Rauschenbusch)は次のように述べている。

[聖公会教会は]かつて飲酒や奴隷制などの社会問題に対して何ら主導的な役割を果たさなかったが、(中略)今日の経済的搾取に抵抗する闘争においては中心的な役割を果たしている²²。

この聖公会教会の変化に最も敏感に対応したのが、祖父や父世代のように南北戦争への従軍経験を持たない「戦争を知らない」世代の聖公会員であった。青年期に急速な産業化や都市化の弊害を目の当たりにした彼らは、剥き出しの資本主義がもたらす不均等な発展により、国が再び分断状態に陥るのではないかと危機感を抱くようになる。そこから、労働者の窮状を改善するための活動に関わるようになる。

彼らが積極的に関わった活動の一つが1887年に聖公会関係者によって設立された「労働者の利益向上のための教会連合(the Christian Association for the Advancement of the Interests of Labor、以下CAIL)」であった²³。ラウシェンブッシュによると、CAILは「おそらくアメリカにおける最初の社会的キリスト教の組織」であったという²⁴。そしてこのCAILの熱心なメンバーの一人であったのが、後にニューヨーク市長となるセス・ロウであった。ロウは1888年に次のように述べている。

労働者の連合と資本家の連合は、(中略)ともにいかなる意味においても互いに相反する勢力ではない。なぜなら両者は、(中略)民衆のための政治を作り出す勢力に抵抗する、同じ勢力の異なる表出に過ぎないからである。

そしてロウは、この両者を仲介し、急速に断片化する社会を統合しうる存在としての教会の重要性を唱えていく²⁵。

ロウにみられるような、社会統合における教会の果たしうる役割に対する高い期待は、聖公会の一つの伝統であった。ヘンリー・F・メイ(Henry F. May)は、それを、「聖公会は教会が率い導く中世の社会の夢を諦めたことはなかった」と指摘している²⁶。確かに、福音主義のプロテスタント教会が個人のモラル改革を通じて社会を変えていくことを重視したのに対し、聖公会は教会を中心として社会を変革し統合するスタンスを保持していた²⁷。この伝統を引き継ぐ形で、社会的キリスト教の興隆を背景に新たに台頭してきた広教会は、さらに聖公会のもう一つの伝統である「第三者」性を土台に、中間的な存在としての聖公会を、「アメリカのための教会(the Church for America)」あるいは「アメリカ国民の教会(A National Church)」と位置づけ、アメリカ社会の統合を図っていく構想を打ち出していく²⁸。こうした聖公会を扇の要とするエキュメニカルな社会実現のための試みにおいて、その基盤の一つとなったのがインスティテューショナル・チャーチであった。インスティテューショナル・チャーチを土台として、ニューヨークの聖公会員は、相対立する二大階級の間に、階級・エスニシティ・宗教などの分断線を越えた包括的な第三極としての「市民」を作り出していく試みを展開していく。19世紀末以降、社会的キリスト教運動と連動する形で興隆したインスティテューショナル・チャーチ運動の先駆的存在となったのが、ニューヨークの聖公会教会における運動であった。そして、その先陣を切ったのが先に述べたセント・ジョージ教会であった。

セント・ジョージ教会は、マンハッタン・ローワー・イースト・サイドの北側のスタイベサント・スクエアに位置し、19世紀半ばまで、その近隣地区は閑静な高級住宅街であった。しかし、1870年代にドイツ系を中心とする移民労働者とその家族が流入してくると、古くからの教会員たちは次第にアップタウンへと転出し、1880年代当初には、「30数区画あった教会信者席のうち、たった2区画しか」使われていない状態にあった²⁹。この閑古鳥が鳴き、つぶれかかった教会の再建に乗り出したのが、平信徒のリーダーの一人として教会運営に携わっていたJ・P・モルガンであった。モルガン率いる平信徒のリーダーたちが、教会の立て直しを託す新たな司祭として白羽の矢を立てたのが、英国人のウィリアム・S・レインズフォード(William S. Rainsford)であった。レインズフォードは1850年にダブリンで生まれ、ケンブリッジ大学卒業後、父親と同じ英国国教会の聖職者の道に進み、その後カナダ聖公会の司祭としてトロントの教会における都市伝道で大きな成功を収めていた³⁰。

レインズフォードがセント・ジョージ教会の司祭に就任した当時のニューヨークでは、移民労働者が多く流入していた地区から撤退するプロテスタント教会が後を絶たなかった。とりわけ富裕層の信者を多く抱える教会ではその傾向が強かった。このダウントウンからアップタウンへの教会の移転の波は、信仰面で深刻な「南北問題」を引き起こし、とりわけ労働者階級のドイツ系プロテスタント住民は「実質的な教会難民」になっていた³¹。こうした状況をつぶさに目撃したレインズフォードは、ニューヨークの教会は労働者に寄り添っておらず、その結果「大きな機会を失っている」と嘆いた。そして「組織化また半組織化された賃労働者たち」がこぞって教会にやってこられるよう、また「組織化されていない貧困層」との間に繋がりを作り出していけるような教会づくりに着手していった³²。のちにレインズフォードは、「インスティテューショナル・チャーチと呼ばれる新たなタイプの教会の基礎を、就任後数ヶ月の間で作り上げ」ていったと回想している³³。

レインズフォードがセント・ジョージ教会を改革するために採った革新的な戦略の一つが、教会のフリー・チャーチ化、すなわち信者席料を取らない教会にすることであった。レインズフォードの考えによると、セント・ジョージ教会の教会員が減り続ける理由は、富裕層の教会員がアップタウンの教会に移ったからだけではなく、また「宗教的に自由の国」アメリカにやってきた移民が自由意志で教会を選ぶことができなかったからでもなかった³⁴。教会が伽藍洞になっている真の理由は、教会員が賃料を払い信者席を確保する信者席賃貸制度(pew-rent system)にあるとレインズフォードは主張した。なぜならこの制度のもとでは、富裕層(家族の中には教会に来ないメンバーもいる)が信者席なかでも一等席に匹敵する区画を一斉に占有する一方、教会に来たくても信者席料を払えない貧しい人びとが排斥されてしまうからである。しかし、この信者席賃貸制度を廃止することは、1880年代初頭当時、かなりラディカルな改革であった。それでも、レインズフォードは信者席賃貸制度を廃止し、教会のフリー・チャーチ化を推し進めていった。もちろん教会に残っていた古くからの信者家族のうち、レインズフォードの改革に賛同できずアップタウンの教会に移った家族もあり、その中にはアルフレッド・セイヤー・マハン提督の家族も含まれていた³⁵。一方、新たに台頭してきた専門職ブルジョワ層や非福音主義のドイツ・ルター派の移民を中心とする労働者とその家族が続々と教会のメンバーに加わっていった。レインズフォードが推し進めたフリー・チャーチ化は、わずか数年で目に見える成果を出す。教会員数

は約200名から1,000名以上に増加し、教会の歳入も礼拝の時に徴収する「封筒方式」の導入により大幅に増加した。こうしたセント・ジョージ教会での成功を受け、1880年代末には「ニューヨークの半数以上の聖公会教会が(中略)フリー・チャーチになってい」たという³⁶。

もちろん、フリー・チャーチ化に反対する声もあった。例えば、セント・トーマス教会の「平信徒のまとめ役」を自称するベンジャミン・W・ウィリアムは、「無料の救済」に対する反感を露わにし、新聞社のインタビューで次のように述べている。「うちの教会では、座席料を支払えない人へのスペースはありませんよ。問題は、よそ者のためにスペースを探すのではなく、彼らをいかに追い出すかなんです。」またウィリアムは、「ニューヨークで最も金持ち」と言われる聖公会教会の教会員の一人として、「うちの教会がメソジストなんかだったら、教会の入り口に案内役を立たせ『どうぞお入りください。救いを受けましょう』と言って、誰かれかまわず引っ張り込むところでしょうが、うちはそういう類いの教会じゃないんでね」と述べた。さらにウィリアムはフリー・チャーチの原則は、ビジネスの原則とも相容れないとし、次のように述べている。「たとえばですよ、劇場にいつて勝手に好きな席に座れますか?もちろんそんなのダメでしょ。同じことがセント・トーマス教会にも言えるわけですよ」³⁷。

このウィリアムのインタビュー記事が地元紙のニューヨーク・サン紙に掲載されると、セント・トーマス教会の司祭と平信徒のリーダーらは一斉に反論に回った。セント・トーマス教会の司祭は、「私たちの教会は社交クラブでもなければ、金持ちの男たちが身勝手に自分たちにとって快適な礼拝を行う場でもない」と断言した。また教会のリーダーの一人も、「彼が言っていることは、セント・トーマスの平信徒リーダーたちの意向をまったく反映したものではない」とウィリアムの主張を真っ向から退けた³⁸。こうしたウィリアムに対する反論からもわかるように、セント・トーマスのような富裕層の信者が多い教会を含むニューヨークの聖公会教会では、フリー・チャーチ化が一般的な潮流となっていた。この流れはセント・トーマスと並び金持ち教会と称されるトリニティ教会やセント・バーソロミュー教会でも同様であり、それぞれアスター家とヴァンダービルト家からの資金提供を受けフリー・チャーチ化し、さらにインスティテューショナル・チャーチとしての活動を展開するようになっていた。また、セント・ジョージ教会のようにフリー・チャーチ化を一早く進めた教会では、一般の信者たちの間ではもはや、「チックリング・ホール(で開催されるコンサート)でいつも同じ席に座れないように、教会でも同じ席に座ることを期待する人はいない」状況になっていたという³⁹。このように、いわゆる「ニューヨークの400人」に入る名士を含む人々からの承認と支援(その理由は「高貴なる義務」といったものから「危険な階級」のコントロールまで多岐に及んだと思われるが)を得ながら、ニューヨークの聖公会教会におけるフリー・チャーチ化は着実に進んでいった。

3. フリー・チャーチ運動から市政改革運動へ

このフリー・チャーチ運動進展の大きな原動力となったのが、19世紀半ばに欧州で興隆したキリスト教社会主義運動の影響であった⁴⁰。ニューヨークではキリスト教社会主義の影響を受けた聖公会員たちが、フリー・チャーチ運動の旗振り役となっていった。彼らがフリー・チャーチ運動を推進するにあたり論理的根拠としたのが、信者席を不動産扱いする信者席賃貸制度は「市場原理を教会に持ち込んだもの」であり、「民主的精神」に基づく「キリスト教の精神」と真っ向か

ら対立するという主張であった⁴¹。フリー・チャーチ推進者らは、教会は「いかなる種類の財産資格や財産差別を容認するべきではない」と訴えた⁴²。

こうした信者席貸制度を不動産所有と結び付け、そこから信者席貸制度をキリスト教の精神に反すると論じたフリー・チャーチ運動のロジックは、『進歩と貧困』(1879年)の著者で、「土地の独占」が社会悪の根源としたヘンリー・ジョージ(Henry George)が唱道した土地単税(single tax on land)のロジックとも相通じるものがあった⁴³。1880年代初頭にニューヨークにやってきたジョージの主張(社会悪の根源としての土地独占の解消)は、まずアイルランド系のコミュニティ、とりわけアイルランドにおける地主制度を廃止し自作農への転換を唱えたアイルランド土地同盟の活動に共鳴していた人々の間に広がっていった。また、ドイツ系の労働者コミュニティにおいてもジョージ支持者は増加していった。さらに、フリー・チャーチの唱道者の間でも、ジョージは熱心な支持者を得ていった。1884年にデトロイトで開催された聖公会教会大会で、ヘンリー・ジョージ(聖公会教会出身)が、幼なじみのリチャード・ハーバー・ニュートン(Richard Herber Newton)司祭の依頼で演説を行うと、大会に来ていた聖公会教会員の間で熱狂の渦が巻き起こった。その様子を、ニューヨークのジョン・W・クレマー(John W. Kramer)司祭は次のように伝えている。ジョージが演説を始めるやいなや「観衆は一気に引き込まれ」、演説の終わりには、「ジョージの主張にはじめは躊躇していた人も、彼の崇高な姿勢に引き込まれ、心からの拍手を送っていた」⁴⁴。そして、1886年にニューヨーク市長選にヘンリー・ジョージが立候補すると、多くの聖公会員が彼の支持に回った。貧富の格差を是正し、労働者を苛酷な搾取から守ることで、より平等なキリスト教社会にニューヨーク市を変えていくことを目指していたフリー・チャーチ推進派のニューヨークの聖公会員たちにとって、ヘンリー・ジョージの市長選は彼らが政治化していく上で重要な契機になった。残念ながら、ジョージはタマニー・ホールが支援した民主党のヒューイットに僅差で敗れたが(一方、若き共和党候補セオドア・ルーズベルトより遥かに多くの票を勝ち取った)、ジョージ支持の聖公会員はこの選挙戦を弾みとして活動の幅を拡大させていった。彼らは、超教派の単一税友愛会やキリスト教社会主義協会といった組織を次々と設立していった。

また、聖職者を中心に移民に対する教会の活動も拡大させていった。これまで聖公会教会は主にドイツ系移民に対する活動を展開していたが、これに加えてイタリア系移民にも活動の範囲を拡げていった。その背景には、イタリア系移民のなかにニューヨークのカトリック教会がアイルランド系の支配下にあることを嫌う傾向があったことや、統一イタリア王国への反感からローマ・カトリック自体に不満を持っていた人も少なからず存在していたことがあった⁴⁵。また、カトリック教徒のイタリア系移民にとって、典礼を重んじる聖公会教会はカトリックと親近性が高く、他のプロテスタント教会より敷居が低く感じられたと思われる。さらに、福音主義派のプロテスタント教会と異なり、聖公会教会は個人のモラルよりも教会と社会の相互関係を重視し、私的領域に立ち入る活動や運動を好まなかったことも、聖公会教会の活動にプラスに働いた⁴⁶。飲酒やダンスに寛容であった聖公会教会は、移民にとっては、禁酒運動を積極的に推進していた福音主義派のプロテスタント教会よりも近づきやすかったと思われる⁴⁷。

こうした移民層に加え、自由主義神学寄りの会衆派や長老派の都市ブルジョワ層も、聖公会に改宗するケースが相次いだ。その背景としては、聖公会が社会的キリスト教の先駆的存在であっ

たことや、フリーメイソンなどへの加盟にも寛容であったことがあげられる⁴⁸。さらに、ユダヤ系移民との間にも聖公会員は密接な関係を築いていった⁴⁹。当時ニューヨークの聖公会員の子弟の多くは、会衆派や長老派が主流であったハーバード大学、イエール大学、プリンストン大学ではなく、コロンビア大学(1754年に英国王ジョージ二世によってキングズ・カレッジとして創設)で学ぶことが多かった。彼らは同じコロンビア大学で学ぶユダヤ人学生と親交を温め、また卒業後も大学の同窓生としての繋がりを通じてユダヤ教徒と親交を深めていった。なかでも、倫理文化教会(The Society for Ethical Culture)会長のフェリックス・アドラー(Felix Adler)と親しい関係を築き、ユニバーシティ・セツルメント協会(The University Settlement Society of New York)の活動をはじめとする様々な社会改革運動やエキュメニズム運動をとともに推進していった。

こうした聖公会員の階級・エスニシティ・宗教の境界線を越えた活動の広がり、タマニー・ホールから市政を取り戻すことを目指す「善良な政府」運動と結びついていく。1897年のニューヨーク市長選(5区合併後の初の選挙)に向けて、「善良な政府」運動の推進者らは、「すべての階級の市民を包括する運動」の推進を掲げた無党派組織「市民連合」(The Citizens' Union)を結成する⁵⁰。創設メンバー165名のなかには、裕福な資本家もいれば労働組合のリーダーもあり、また聖公会員もかなりいた。そしてこの市民連合の初代会長に就任したのが、本稿の冒頭で触れたロバート・フルトン・カティングであった。カティングはコロンビア大学卒業後、製糖業や銀行業などビジネスの世界で活躍するとともに、J・P・モルガンと同様に熱心な聖公会教会員であった。カティングら「善良な政府」運動の推進者は、タマニー派勢力の権力基盤である野放しの資本主義を規制して腐敗の温床を撲滅すべく、市政奪還を目指していく。そこで彼らが市長選の候補者として担いだのが、セス・ロウであった。ロウはカティングのコロンビア大学時代の同級生で、大学卒業後は父親が経営する茶と絹の貿易会社で働いていた。その後、政治の世界に転身しブルックリン市長を二期務めたのち、1890年からはコロンビア大学の学長として大学改革に取り組んでいた。モルガンやカティングと同様に熱心な聖公会員であったロウは、彼らと同じくセント・ジョージ教会の運営リーダーを務め、男性聖書勉強会の教師役もロウは積極的に買って出ていた。後にロウ自身が回想しているように、彼が経験した数多くの役職の中で、男性聖書勉強会での教師ほど人間について学べる場はなかったという⁵¹。

ロウの市長選では、セント・ジョージ教会をはじめとするインスティテューショナル・チャーチや男性聖公会員の信仰グループが、強力な支持基盤となっていく。後者の信仰グループに関しては、カティングがリーダーを務めていた聖アンデレ友愛会がロウを熱心にバックアップしていく。聖アンデレ友愛会はシカゴのセント・ジェームズ教会の聖書勉強会として1883年に発足し、その後「若い男性たちの間に神の国を拡げる」ことを目的とする聖公会教会の友愛会としてアメリカ各地に広がり、1895年には全国で1,200支部1万2,000名の会員を擁する団体に成長していた⁵²。このうちニューヨーク市支部には約500名の会員がおり、ニューヨーク・タイムズ紙によれば、その多くは「ビジネスや社交界の高い位置にある裕福な」の男性たちであった⁵³。会員の社会的ステイタスから考えると、聖アンデレ友愛会のニューヨーク市支部はブルジョワ・ニューヨーカーの高級社交クラブの様相を呈していたと思われる。しかし一方で聖書勉強会や講話会などのイベントを通じて、若い世代の聖公会員の間に、ニューヨークにおける社会問題や政治問題に対する意識と関心を高める場ともなっていた。こうした聖アンデレ友愛会の活動は、さらに

聖公会教会における宗教と政治の間の垣根を下げる試みと連動し、聖公会員の間に公共心と政治的責任感の高揚を図っていった。例えば、会衆派から聖公会に移ったW・D・P・ブリス(W. D. P. Bliss)司祭は、「党大会のドアに掲げられた『ここに入りたければ、宗教を捨てよ』は読み捨てるべき」と訴えた。またブリスは、今、求められているのは「日曜学校関係者の政治家である」と力説した。なぜなら、昨今の政治における腐敗の蔓延は、「善良な男性たちが政治から離れ、その代わりにプロの腐敗屋が入り込んだことが原因であり」、よって「キリスト教徒は、政府に対する責務、投票箱に対する責務、党への責務があることを強く認識する必要がある」と唱えた⁵⁴。こうした聖公会における宗教と政治の間の垣根を取り払う試みは、「善良な政府」運動と接続していく。彼らの目的は、アメリカにおける政教分離の原則(教会と国家の制度的な分離)を覆すことではなく、宗教を通じて政治に公共善を取り戻すことにあった。多くの聖公会員が、市民の手に市政を取り戻すことを目標に掲げる「善良な政府」運動を支援し、ロウの市長選を支えていく。

そして1897年のニューヨーク市長選は、地方の首長選を超えた注目を集めていく。リベラル派の会衆派牧師ライマン・アボット(Lyman Abbott)が編集する『アウトルック(The Outlook)』は、今回のニューヨークの市長選を、「ローカルな戦いではあるが、それはゲティスバーグと同様に、アメリカ市民の命運がかかった戦いである」とし、アメリカの将来を左右する南北戦争以降の一大事であると位置付けた⁵⁵。市長選において、残念ながらロウは民主党系組織タマニー・ホールの支援を受けたロバート・ヴァン・ワイクに敗れる。しかし、労働騎士団の9割の支持を取り付けるなど、幅広い層からの支持を得たことは、「善良な政府」運動に弾みをつけていった⁵⁶。その後、紆余曲折を経ながらも、カティングのリーダーシップのもと市民連合の候補者としてロウは1901年の市長選に出馬する。

しかし今回の選挙でロウが当選するには、前回以上に浮動票を獲得する必要があった。そのため、「善良な政府」運動の推進者らは、富裕層の多いアップタウンでは市政における効率性の向上や公共善の回復を訴え、また移民労働者の多いダウントウンでは、テネメント(tenement)住宅の改良や労働環境の改善を訴えていった。また選挙運動を、移民を「市民」として再教育する重要な機会と捉えていた彼らは、移民に対して市政に対する当事者意識を喚起する試みを展開していった⁵⁷。さらに、今回の選挙でロウ陣営にとって追い風となったのは、日曜の酒類販売の禁止が選挙の争点の一つとなったことであった。福音主義のプロテスタント教会が日曜の酒類の販売は売春と汚職の温床になると禁止に賛成する一方、ドイツ系移民らは個人の自由を侵害するとして反対し、またフェリックス・アドラーらユダヤ系の人々も貧しい人々いじめであると反対した⁵⁸。日曜の酒類販売禁止に対する反対票の一部もロウに流れていった。このように多くの無党派層の票を集めたことで、1901年の選挙でロウは勝利する。そして、当選祝賀会のスピーチにおいて、「善良な政府」運動のリーダーとしてカティングが掲げたのが、本稿の冒頭で取り上げた「民主主義」「宗教」「政府」の三位一体であった。ここでカティングが民主主義や政府と並び宗教として語ったものは、福音主義のプロテスタント教会が重視する個人のモラルに基礎を置くものというよりは、第三者的な存在としての聖公会を要とするエキュメニカルな総体として公的領域を下支えしていくものであった。そこから彼らの試みは、アメリカ社会におけるリベラリズムの変容、そしてそれに基づく公的領域の再編とも連動していく。

4. 「身体化された過去」のヘゲモニー実践

19世紀後半、アメリカのリベラリズムはレッセ・フェールを標榜する古典的なリベラリズムから改革主義的なリベラリズムへと変容していった⁵⁹。その背景一つとされるのが、資本主義と民主主義の対立の緩衝帯としての消費社会の台頭であった⁶⁰。消費社会においては、市場における買い手としての消費者の等価性(各人一顧客)と、選挙に基づく民主主義における市民の等価性(一人一票)とが同じ性質を帯びてくる。この点をいち早く見抜いた市民連合のカティングは、企業倫理と民主主義の双方の観点から、「我々はみな消費者である」とのスタンスを取った⁶¹。そしてカティングら「善良な政府」運動の推進者たちは、不特定多数の市民が無記名投票により民意を形成する新たな時代の民主主義においては、第三者的中立性を土台とする包括的な公共領域の構築が重要であると考えた。そこから、インスティテューショナル・チャーチでの活動、CAILなど労働改革運動、選挙活動などを通じて、移民をはじめとする多様なバックグラウンドのサイレント・マジョリティーを彼らと同じ価値観を共有する「市民」として統合し、第三極を形成していく試みを展開していく。

当然ながら彼らの活動は、民主党と共和党の双方の政治家やその関係者から批判を受ける。当初より彼らの運動は、「あからさまに社会主義的」とであると批判された⁶²。また、「善良な政府」運動の推進者の個人的性格や特徴も槍玉にあがっていった。例えば、カティングは、後に共和党のニューヨーク州知事となるチャールズ・エバンス・ヒューズ(Charles Evans Hughes)から、「過食で虚弱な、人のいいなりになる、役立たずのプードル」ときこおろされた⁶³。またロウも、「名家出身の御婦人的」あるいは「日曜学校の先生政治家」などと揶揄された⁶⁴。さらにロウの市政については、「すべての階級による大衆の政府[を目指したもの]ではあるが、(中略)やはり民主党の貴族版控えにすぎない」、あるいは所詮「ブルジョワ改革者」による宗教的な市政であり、「男の世界」が入り込む余地はないなどと評された⁶⁵。さらに、ニューヨーク州の共和党のボス、トマス・C・プラット(Thomas C. Platt)は、「お気楽で無分別な金持ち貴族層による政治的異種混合体が、無党派を装って」突如現れたかと思ったら風のように去って行った。おかげでやっと「ニューヨークはまたもとの古い街に戻った」と胸をなでおろした⁶⁶。こうプラットが語るように、市民連合の市政は長続きしなかった。次の選挙でロウは敗れる。その敗因にはいくつもの要素が複雑に絡んでいたが、上述の批判についても、単なる個人的な中傷として片づけられないものがあった。というのも、そこには批判者側の視点から見た、聖公会員たちの身体化された性向や習慣や能力への見解が示されていたからである。

本稿のはじめにで述べたように、社会学者のベルナル・ライールは、家族、学校、職業、宗教、文化、政治などの「多種多様な行為の文脈の過去」の往来から行為者が得た性向や習慣や能力の貯蔵庫を「身体化された過去」と呼び、この「身体化された過去」が「現在の(行為)文脈」と交差した地点に実践が産出されるとしている⁶⁷。またライールは、人文・社会科学領域の研究において、しばしばこの行為者の「身体化された過去」が周縁化され、あたかも「過去をもたない」かのように扱われる傾向があると指摘している⁶⁸。さらにこの行為者の過去の社会化の所産を取り戻す試みとしてライールは、行為者の多様な「社会的なものの折り目を一度広げて」みることの重要性を説いている⁶⁹。話しを聖公会員に戻すならば、上述の「善良な政府」運動を推進した聖公会員批判者たちによる寸評には、聖公会員らの「身体化された過去」に対する皮肉や揶揄が色濃く滲ん

でいる。そして、この一見すると巷のゴシップ話にしか見えない同時代の批判者たちの批評を手がかりに、聖公会員たちの「社会的なものの折り目」を広げて、彼らの試みを今一度読み解いてみるならば、それは、自分たちにとって馴染み深い聖公会の教義や、公的徳性に基づく共和主義、紳士的な商取引の慣行、筋肉的(muscular)でない男性性などを、新たな時代におけるリベラルで民主主義的な公共領域に埋め込む試みであったと言えないだろうか。

また、聖公会員らが目指した公共領域の構築とは、彼らの「身体化された過去」を、第三者的な中立かつ公平なものとして普遍化する試みであったとも言える。「善良な政府」運動の推進者らが構築を目指した公共領域とは、人類学者のタルル・アサドの言葉を借りるならば、必ずしも万人が等しく「遂行的発話を行える」場ではなく、それは「話を聞いてもらえる物理的能力」が必要とされる場であった⁷⁰。そしてこの「話を聞いてもらえる」能力とは、「善良な政府」運動の推進者にとって馴染み深く身体化された能力であり、具体的には共和主義の公的徳性のレトリックや、聖公会教会の伝統としての「第三者」性を土台とする「寛容・包括性・合理性」の理念に則り発話し交渉できる能力であった。つまり彼らが構築を目指した公共領域とは、彼らの理念や信条に基づいて発話し交渉できる人びとにのみ開かれた場であり、それは新たにニューヨークにやってきた多種多様な人々を、彼らと同じ言語で対話可能な「市民」へと「再生」し「救済」するための場としても想定されていた。言い換えるならば、彼らの試みとは、彼らが精通し馴染み深い性向や習慣や能力を「市民」の要件とすることで、より包括的な公共領域の構築を目指す試みであり、またそれは自らの「身体化された過去」を普遍化し、第三極としての「市民」を構築することで、競合する諸勢力に対してヘゲモニーを確立しようとする実践でもあった。

おわりに―「第三者」性のポリティクス

本稿では、19世紀末にニューヨークの聖公会員が推進したインスティテューショナル・チャーチ運動と「善良な政府」運動の展開を追ってきた。そこから、宗教・政治・階級の連結による二極化により断片化した都市空間を再統合しようとした聖公会員ら試みが、この二極化の構造に収まらず曖昧な存在となっていた聖公会員によるヘゲモニー実践、すなわち、彼らの「身体化された過去」を受肉されたモノとして公共領域に埋め込み、それを普遍的な要素とすることで多様な人びとを「市民」として統合していく試み、であったことを示した。こうした聖公会員の活動を、階級の視点から見ると、それはまさに彼らが属するブルジョワ階級による支配構造を隠蔽しようとする虚偽意識に基づく実践であったと言える。聖公会員らが運動を展開し始めた1880年代は、「血みどろの80年代」と呼ばれたように、労使闘争が多発し階級分裂への危機意識が高まった時期であった⁷¹。多種多様なバックグラウンドの移民を中心とするサイレント・マジョリティを「市民」として統合することで第三極を形成しようとした聖公会員らの取り組みは、階級を不可視化することにより、ブルジョワ階級による支配構造を安定化しようとするまさに虚偽意識の産物であった。しかし一方で、なぜ彼らはこうした虚偽意識に囚われたのか、また彼らの虚偽意識を具体的に構成していたものは何であったのかという疑問が残る。本稿ではこの問いを、ライールの「異種混濁的な複数の性向の担い手」としての行為者の概念に拠りながら、とりわけ彼らが所属する聖公会教会に注目しながら考察した。

1870年代以降、聖公会教会では、伝統としての「第三者」性を土台に「寛容・包括性・合理性」

を掲げて組織化された広教会が台頭し、インスティテューショナル・チャーチの活動をはじめとする社会的キリスト教運動を積極的に推進していった。こうした活動に参加した、とりわけ若い世代の聖公会員らは、労働者階級を貧困から救済するための社会改革を通じて、地上における「神の国」の漸進的な実現を試みる活動を積極的に展開していく。こうした聖公会員のスタンスは、当時、リベラルなプロテスタントの社会改革者の間で広く共有されるものであった。しかし一方で、聖公会員に特有の特徴も存在していた。

宗教史家のゲイリー・スコット・スミスによると、社会的キリスト教運動に参加した上流・中産階級のプロテスタント社会改革者の多くは、ヘンリー・ジョージの土地単税などの社会構造の変容を伴う改革には消極的もしくは否定的であったという。その背景には、個人のモラルの改善を通じた社会改革やアメリカのキリスト教化に重点を置く傾向があったからだという⁷²。確かに、第二次大覚醒を通じて興隆した奴隷制廃止運動や禁酒運動などの社会改革運動の系譜の上に、社会的キリスト教運動を位置付けるならば、プロテスタント社会改革者のこの傾向はアメリカのキリスト教の一つの「伝統」として捉えることができるだろう。一方、福音主義から距離を置いてきた聖公会員は、禁酒運動をはじめとする個人のモラルの改善を通じた社会改革よりはむしろ、教会を土台とする公共善に基づく社会変革と社会統合を志向した。ヘンリー・ジョージの支援や、「善良な政府」運動への積極的な参加は、その一貫として捉えることもできるだろう。

さらにこうした聖公会員のスタンスは、前述のように、彼らの批判者によって「あからさまに社会主義的」とであると批判されていく。ここで言う「社会主義的」とは、当時アメリカで興隆していた、議会制民主主義に基づく変革により漸進的に経済的平等を目指すフェビアン主義と近い意味合いとともに、中立性を旨とする「第三者」性への否定的な意味合いも含まれていた。この「第三者」性の批判については、共和党でもなく民主党でもなく、また資本家階級でもなく労働者階級でもなく、そしてプロテスタントでもなくカトリックでもなくといった聖公会員の「包括的」な「市民」概念に対する批判と同時に、彼らのジェンダーやセクシュアリティを擲論するものも含まれていた。当時、プロテスタントの社会改革運動においてもマスキュリニティが強調されるようになり、一昔前の紳士的な男性性＝「第三の性(the third sex)」＝ホモセクシュアル＝社会主義者という図式が台頭するなか、聖公会員は新たな時代の諸問題を解決するだけの力を持ちあわせない能力者(「役立たずのプードル」等)として評された⁷³。

先に述べたように、再選を目指した市長選でロウは敗退する。その後聖公会員は、活動の軸足を政治から専門職の職業倫理の確立、宗教におけるエキュメニカル運動の推進、大学での社会学や経済学の研究、リベラルな言説の出版事業などへ移していく。こうした聖公会員の活動は、20世紀アメリカのリベラル・デモクラシーの基盤としての「中立的」な公共領域の構築と接合していった。本稿で取り上げたニューヨークにおける社会改革運動は、聖公会員たちのリベラルな公共領域の構築に向けた最初の取り組みであった。

最後にもう一度、本稿で検討してきた聖公会員の活動をまとめてみたい。急速に断片化が進行するニューヨークの公共領域を再縫合しようとした聖公会員らの試みとは、空間的にはフロンティアが消滅し、歴史的にはヨーロッパと同じ歴史時間にアメリカが巻き込まれた時代において、時間の侵食を受けない中立的な空間としての公共領域に、彼らが考える共通の公共善を埋め込むことで、ニューヨークを剥き出しの資本主義のショーケースから救済しようとする試みであった。

しかしそれは同時に、自分たちの「身体化された過去」を共通の公共善として中立化することで、台頭する新興の資本家層や、勢力を増す労働者階級、また福音主義派のプロテスタントを中心に興隆していたマスキュリンなキリスト教への対抗を図るヘゲモニー実践でもあった。そしてこの分析において重要な鍵となったのが、聖公会員たちが様々な境界線を行き来しながら活動を展開していたことである。これらの境界線には宗教と世俗の区分も含まれる。再びライールの行為者の概念に従うならば、私たち個々人は、一貫しない性向の「貯蔵庫」であり、不均質な社会化の所産を背負い、日々地続きの社会空間のなかで様々な境界線をまたぎ生活している。こうした人の往来に、通行止めを設けてきたのは、もしかしたら私たちの間で共有されてきた世俗主義を含む「中立的」な視点であったかもしれない。一方、聖公会員たちが目指したリベラルな公共領域とは、宗教・政治・階級が連動した二項対立を止揚することで、人種・エスニシティ・ジェンダーを含む数多の差異等を閑視し、多様な人々の統合を図るものであった。それは、多種多様な境界線を不可視化することにより、相互の境界を自由に行き来することを目指すものでもあった。しかしここで忘れてはならないのは、すべての境界線がすべての人に対して不可視化され、すべての境界線をすべての人が自由に往来できるわけではないということである。聖公会員たちが構築を試みた包括的な「市民」の中に、黒人や中国系の人々が含まれていなかったことを覚えておかなくてはならない。私たちは、リベラルな公共領域に埋め込まれた「身体化された過去」を、今一度、注意深く具体的に腑分けしていく必要があるだろう。そしてそれは、個々の具体的な文脈に埋め込まれた「第三者」性のポリティクスを明るみに出すとともに、情緒・反知性・福音主義と結びつけられることが多い「宗教」概念を拡げていくことにもなるだろう。

〔註〕

- 1 Robert Fulton Cutting, "City Government and the People," *Municipal Affairs* Vol. 5 (1901), 885.
- 2 Milo T. Bogard, ed., *The Redemption of New York: Told by New York Newspapermen for the Press Scrap Book* (New York: P. F. McBreen and Sons, 1902).
- 3 ニューヨークは17世紀末頃から諸悪の根源の金の街と描写されてきたが、19世紀後半になるとこうした傾向がさらに加速する。20世紀初めにニューヨークを訪れたロシアの作家マキシム・ゴーキーも、ニューヨークを「富と物欲の街」と呼んだ。Edwin G. Burrows and Mike Wallace, *Gotham: A History of New York City to 1898* (New York: Oxford University Press, 1999), xvi, 60; Maxim Gorky, "The City of Mammon," *Appleton Magazine* VIII, Aug. 1906.
- 4 インスティテュショナル・チャーチについては、George Hodges and John Reichert, *The Administration of an Institutional Church* (New York and London: Harper and Brothers Publishers, 1906)を参照。インスティテュショナル・チャーチの活動は、スーパ・キッチンのようなものから、職能訓練学校、レクリエーション活動など多岐にわたるコミュニティ・サービスを労働者とその家族に提供するものであった。
- 5 アメリカ合衆国の成立後、「プロテスタント監督派教会(The Protestant episcopal church)」として正式に英国国教会から独立する。本稿ではThe Episcopal Churchを聖公会教会と訳す。ニューヨークにおいて聖公会教会は、建国期からのニューヨークのブルジョワ層が、新興のブルジョワ層に対して「伝統」を伝えていく役割も果たしていた。19世紀後半から20世紀初頭のアメリカにおける聖公会教会については、Peter W. Williams, *Religion, Art, and Money: Episcopalians and American Culture from the Civil War to the Great*

- Depression* (Chapel Hill: North Carolina University Press, 2016)を参照。
- 6 キリスト教社会主義については、John C. Cort, *Christian Socialism: An Informal History* (Maryknoll, New York: Orbis Book, 1988); Jacob H. Dorn, ed., *Socialism and Christianity in the Early 20th Century America* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1998)を参照。
 - 7 19世紀末から20世紀初頭のニューヨークにおけるプロテスタント教会の社会改革運動については、Matthew Bowman, *The Urban Pulpit: New York City and the Fate of Liberal Evangelicalism* (New York: Oxford University Press, 2014); Daniel Czitrom, *New York Exposed: The Gilded Age Police Scandal That Launched the Progressive Era* (New York: Oxford University Press, 2016)を参照。
 - 8 Richard B. Latner and Peter Levin, "Perspectives on Antebellum Pietistic Politics," *Reviews in American History* 4, no. 1 (1976), 16, 19-20; Samuel DeCanio, "Religion and Nineteenth-Century Voting Behavior: A New Look at Some Old Data," *The Journal of Politics* 69, no. 2 (2007), 339-40. エスニシティや宗教の区分による19世紀における政党支持の二分化については、Ronald Formisano, *The Birth of Mass Political Parties: Michigan, 1827-1861* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1971); Paul Kleppner, *The Cross of Culture: A Social Analysis of Midwestern Politics, 1850-1900* (New York: The Free Press, 1970)を参照。階級の区分による政党支持の二分化を主張した研究については、Tse-min Lin, "The Historical Significance of Economic Voting, 1872-1996," *Social Science History* 23, no. 4 (1999)を参照。また政党支持において文化と経済が相互に密接な関係にあったとする見解については、Daniel Walker Howe, "The Evangelical Movement and Political Culture in the North during the Second Party System," *The Journal of American History* 77, no. 4 (1991)を参照。
 - 9 デヴィッド・L・ホームズ(岩城聡訳)『アメリカ聖公会小史』かんよう出版、2018年、49-50頁。
 - 10 James J. Connolly, *An Elusive Unity: Urban Democracy and Machine Politics in Industrializing America* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2010), 192. 「善良な政府」運動については、Clifford Wheeler Patton, *The Battle for Municipal Reform: Mobilization and Attack, 1875-1900* (Washington, D.C.: American Council of Public Affairs, 1940)を参照。新たな「市民」概念の構築との関係については、John G. Sproat, "The Best Men": *Liberal Reformers in the Gilded Age* (New York: Oxford University Press, 1968), 243-71; Shelton Stromquist, *Reinventing "The People": The Progressive Movement, the Class Problem, and the Origins of Modern Liberalism* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2006), Ch.3を、またマスキュリニティとの関係については、Kevin P. Murphy, *Political Manhood: Red Bloods, Mollycoddles, & the Politics of Progressive Era Reform* (New York: Columbia University Press, 2008), Ch.2を参照。
 - 11 ジェラルド・W・マクファアランドは、ニューヨークではマグワンプの4割以上が聖公会員であったとしている。Gerald W. McFarland, *Mugwumps, Morals and Politics, 1884-1920* (Amherst, MA: University of Massachusetts Press, 1975), 183.
 - 12 社会的キリスト教の同義語として、社会的福音(The social Gospel)がよく使われるが、社会的福音は20世紀に使われるようになった用語であり、本稿では社会的キリスト教を用いる。Christian Smith, *Social Gospel in American Religion: A History* (New York: New York University Press, 2017), 21.
 - 13 Christian Smith, "Introduction," in Christian Smith ed., *The Secular Revolution: Power, Interests and Conflict in the Secularization of American Public Life* (Berkeley, CA: University of California Press, 2003), 36; Geoffrey Blodgett, "The Mugwump Reputation, 1870 to the Present," *Journal of American History* 66, no. 4 (March 1980), 876.
 - 14 ベルナル・ライル(鈴木智之訳)『複数の人間——行為の様々な原動力』法政大学出版会、2013年、22、24、68、95頁。ベルナル・ライル(村井重樹訳)『複数の世界——社会諸科学の統一性に関する考察』青弓社、2016年、26-27頁。
 - 15 アメリカ聖公会史家のシャタックとヘインによると、19世紀を通じて寄宿舎学校は、聖公会の組織的な

神学的理念の表出と実践の場であったという。David Hein and Gardiner H. Shattuck Jr., *The Episcopalians* (Westport CN: Praeger, 2004), 342.

- 16 1828年に聖公会によって設立されたニューヨークのフラッシング・インスティテュート(The Flushing Institute)は、その後のアメリカにおける寄宿舎学校のプロトタイプとなったと言われている。フラッシング・インスティテュートは、聖公会員を一つの「家族」と捉え、聖公会員の子弟に聖公会の教義や理念を身につけさせるとともに、生徒の間に強い信頼関係や絆を醸成していった。聖公会は、1830年代から1840年代にかけて6校の寄宿舎学校を設立した。19世紀前半の聖公会の寄宿舎学校の設立については、David Hein, "The High Church Origin of the American Boarding School," *Journal of Ecclesiastical History* 42 (1991) を参照。
- 17 1856年の創設以来、多くの政治家や著名人を輩出してきたニューハンプシャーのセント・ポール校(St. Paul's School)も、聖公会が設立した寄宿舎学校である。アスター家やヴァンダビル家をはじめとするニューヨークの富裕層の聖公会員の子弟の多くもここで学んだ。アメリカの寄宿舎学校の歴史については、James McLachlan, *American Boarding Schools* (New York: Charles Scribner's, 1970); Steven B. Levine, "The Rise of American Boarding Schools and the Development of a National Upper Class," *Social Problems* 28, no. 1 (October 1980) を参照。
- 18 Daniel Walker Howe, "The Evangelical Movement and Political Culture in the North during the Second Party System," 1230.
- 19 「徳」を「商業」の基盤に据えるジェントルマン資本家の伝統を引き継ぐ、古くからのニューヨークのブルジョワ層は、新興の資本家たちを公共善を顧みない強欲で不道徳な人々と見なし、彼らとの差別化を図っていった。John G. Sproat, "The Best Men," 148. Sven Beckert, *The Monied Metropolis: New York City and the Consolidation of the American Bourgeoisie, 1850-1896* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), 40-1.
- 20 David Hein and Gardiner H. Shattuck Jr., *The Episcopalians*, 98-99.
- 21 Richard Spielmann, "A Neglected Source: the Episcopal Church Congress, 1874-1934," *Anglican and Episcopal History* 58 (March 1989), 50, 55.
- 22 "Walter Rauschenbusch, *Christianizing the Social Order* (Boston: Pilgrim Press, 1912), 22.
- 23 "Clergymen who are Socialists: the Rise and Growth of an Interesting Movement," *The Christian Union* (Nov. 8, 1890), 2. *The Christian Union* 紙はリベラル派の会衆派牧師ヘンリー・ワード・ビーチャー(Henry Ward Beecher)が長年編集を務めた新聞であり、ビーチャーの引退後は同じく会衆派のライマン・アボット(Lyman Abbott)が編集を引き継ぎ、後に名称を*The Outlook*と変えて発行を続けた全国紙である。
- 24 Walter Rauschenbusch, *Christianizing the Social Order*, 22.
- 25 Seth Low, "Relation of the Church to the Capital and Labor Question," *Problems of American Civilization: Their Practical Solution the Pressing Christian Duty of To-day* (New York: The Baker and Taylor, co., 1888) 123, 125, 128.
- 26 Henry May, *Protestant Churches and Industrial America* (New York: Octagon Books, 1977), 186.
- 27 David Hein and Gardiner H. Shattuck Jr., *The Episcopalians*, 98.
- 28 Ibid., 88-9.
- 29 Elizabeth Moulton, *St. George's Church, New York* (New York: St. George's Church, 1964), 62.
- 30 George Hodges and John Reichert, *The Administration of an Institutional Church*, xxi.
- 31 A. F. Schauflier, "Godless New York," *The Christian Union* (May 12, 1885), 7.
- 32 W. S. Rainsford, *The Story of A Varied Life*, 242, 312.
- 33 Ibid., 198.
- 34 A. F. Schauflier, "Godless New York," 7.

- 35 W. S. Rainsford, *The Story of A Varied Life*, 314.
- 36 George Tallman, "What One Church is Doing," *The Christian Union*, Dec. 9, 1886, 8; "The Free Pew System," *The Christian Union*, Jan. 3, 1889, 8.
- 37 "No Free Salvation Here," *The Sun*, Feb. 14, 1889, 1.
- 38 "Strangers are Welcome," *The Sun*, Feb. 15, 1889, 1.
- 39 "The Free Pew System – Some of the Difficulties," *The Christian Union*, Jan. 3, 1889, 8.
- 40 Robert W. Richard, *History of the Episcopal Church: Revised Edition* (New York: Church Publishing Inc. 1999), 153.
- 41 Ibid.
- 42 George Tallman, "What One Church is Doing," *The Christian Union*, Dec. 9, 1886, 8.
- 43 Edward N. Fuller, "Progress and Reformers," *The Free Church Record* 4, no. 1 (1896), 152; Clyde Griffen, "Christian Socialism Introduced by Gompers," *Labor History* 12, no. 2 (1971), 197 n. 5; Clyde Griffen, "Rich Laymen and Early Social Christianity," *Church History* 36, no. 1 (1967), 63. イギリスにおいてもジョージの土地単税はフリー・チャーチ関係者の間で大きな反響を呼んだ。Allan W. MacCall, *Land, Faith, and the Crofting Community: Christianity and Social Criticism in the Highland Scotland, 1843-1893* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006), 132, 163-4.
- 44 Henry George, Jr., *The Life of Henry George* (New York: Doubleday & McClure company, 1900), 448-9.
- 45 ホームズ『アメリカ聖公会小史』, 160頁。
- 46 David Hein and Gardiner H. Shattuck Jr., *The Episcopalians*, 86.
- 47 ホームズ『アメリカ聖公会小史』, 128頁。
- 48 Ibid.
- 49 Clyde Griffen, "Christian Socialism Introduced by Gompers," 204, 213; Clyde Griffen, "Rich Laymen and Early Social Christianity," 53.
- 50 "The New York's Citizens' Union," *The Outlook*, November 6, 1897, 630.
- 51 Elizabeth Moulton, *St. George's Church, New York*, 71.
- 52 Joseph T. Wright, "The Brotherhood of St. Andrew," *The Independent*, Aug. 8, 1895, 13.
- 53 "St. Andrew Brotherhood: Splendid Work that It is Doing Among Men in This City," *The New York Times* (Jun. 16, 1895), 29.
- 54 W. D. P. Bliss, "Christian Socialism: Methodism Applied to Social Order," *Zion's Herald* (Dec. 17, 1890), 0. *Zion's Herald*はメソジスト監督派教会が発行していた新聞であり、ニュー・イングランドを中心に流通していた。
- 55 "A National Issue," *Outlook* 57, Oct. 23, 1897, 461.
- 56 *New York Times*, Sep. 10, 1897, 2.
- 57 Gerald Kurland, *Seth Low: the Reformer in an Urban and Industrial Age* (New York: Twayne Publisher, inc., 1971), 191.
- 58 Ibid., 151.
- 59 環大西洋の視点からリベラリズムの変容を捉えたものとしては、Daniel T. Rodgers, *Atlantic Crossing: Social Politics in a Progressive Era* (Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1999)を、19世紀末の農民運動から論じたものはElizabeth Sanders, *Roots of Reform: Farmers, Workers, and the American State* (Chicago: University of Chicago Press, 1999)を、また社会主義のアメリカにおける影響から論じたものは、Dorothy Ross, "Socialism and American Liberalism: Academic Social Thought in the 1880s," *Perspectives in American History* 11 (1977-8): 5-80を参照。
- 60 この視点からリベラリズムの変容を論じたものとしては、Nancy Cohen, *The Reconstruction of*

American Liberalism, 1864-1914 (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2002); Kathleen G. Donohue, *Freedom from Want: American Liberalism and the Idea of the Consumer* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2003)を参照。

- 61 "Brotherhood of St. Andrew," *New York Times*, Oct. 3, 1898, 1.
- 62 *The New York Sun*, Aug. 16, 1897, 6.
- 63 Quoted in Kevin P. Murphy, *Political Manhood*, 214.
- 64 *The Nation*, June 28, 1888.
- 65 Lincoln Steffens, *Shame of the Cities* (New York: S.S. McClure company, 1904), 286-7; Gerald Kurland, *Seth Low*, 198.
- 66 Thomas Platt, *Autobiography of Thomas Collier Pratt* (New York: Dodge Press, 1910), 365-7.
- 67 ライール『複数の個人』、21、24頁；ライール『複数の世界』、26-7頁。
- 68 ライール『複数の世界』、26-7、33頁。
- 69 ライール『複数の個人』、26頁。
- 70 タラル・アサド(中村圭志訳)『世俗の形成——キリスト教、イスラム、近代』みすず書房、2006年、242頁(傍点ママ)。
- 71 Ida M. Tarbell, *All in the Days Work: An Autobiography* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1939), 82.
- 72 Gary Scott Smith, *The Search for Social Salvation: Social Christianity and America, 1880-1925* (Lanham, MD: Lexington Books, 2000), 31.
- 73 キリスト教の「男性化」については以下のものを参照。Clifford Wallace Putney, *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2001); Tony Ladd and James A. Mathisen, *Muscular Christianity: Evangelical Protestants and the Development of American Sport* (Grand Rapids, MI: Baker Books, 1999). また社会改革運動におけるマスキュリニティの強調については、Kevin P. Murphy, *Political Manhood*, Ch. 3を参照。